

## 6 マレーシア

### ● Brig. Gen. Khairy Jamaluddin マレーシア青年スポーツ大臣からのメッセージ

マレーシア政府及びマレーシア青年スポーツ省を代表し、第44回「東南アジア青年の船」事業の訪問国活動に際し、皆様をマレーシア・クアラルンプールへ歓迎いたします。

にっぽん丸でのマレーシアまでの航海は素晴らしい旅であったことでしょう。皆様がマレーシアでの訪問国活動を私達と共に楽しんでくださること、そして、マレーシアをもう一つの故郷だと思い、マレーシアの多民族文化の美しさとユニークさを体験してくださることを希望します。

今晚、この場に来賓の皆様と東南アジア各国から参加の皆様が一堂に会したことは、本当に光栄で喜ばしいことです。この歓迎夕食会は、素晴らしい青年育成事業に対する私達の強い関わりを表しています。そして、ASEAN各国と日本の人々の親善と信頼に寄与する、相互理解の醸成及び促進、また、友情の持続というこの事業の顕著な効果を賞賛します。

私は、日本が強いリーダーシップを発揮しSSEAYPを実施することにより、ASEAN各国の絆を強める事業をこれまで成功に導き、長年にわたり牽引し続けていることを大変喜ばしく思います。日本政府に対し厚く御礼申し上げます。皆さん、日本の先見性、不動の決意、そして寛大さに拍手しましょう。

マレーシアは、私達皆に有益である青年育成事業をしっかりと支援し続けることを決意します。SSEAYPは、私達を隔てる海を航海しながら、私達の深く長く続く友情と団結を象徴する明るく輝く宝石のようです。

SSEAYPにはアジア各国からの青年達が集います。そこでは、地球規模の課題に挑み解決策を模索する議論を重ね、創造的で革新的な方法がどのように生まれ鍛錬されるのかを知ったり、それぞれの長所を更に強化し短所を一掃するという変化をもたらす原動力を得たりしま

す。航海を共にする中で、刺激的そして活気に満ちた環境下で、船内ではチームとして、また家族として、一人ひとりが力を発揮し、航海自体が目的地にたどり着くことと同様に重要であるということを実感することでしょう。

この点において、SSEAYPは1974年以来、ASEAN各国と日本にとって、お互いの文化と生活をより知るための最高の舞台であり続けています。特に、将来各国でリーダーシップを発揮するであろう青年達の前に待ち受ける困難について考えれば、この信頼の価値と友情は計り知れません。

この事業は、主権国家としてあるいは地域のパートナーとして現在抱える数多くの地域的なあるいは地球規模の課題に多角的に取り組むための、強い基盤を築き、発展し続けています。また、相互に有益な解決方法を探求するために必要な、自信・尊敬・信頼を与えてくれます。

このような事業を長年にわたり続けることで、私達が友好的な国々そして信頼するパートナーとして共に成長していれば、私達が求める均衡は最終的にはきっと達成できるでしょう。

ですから、今晚は、友情と結実した協力の印として、食事や文化パフォーマンスをぜひお楽しみください。そして、この素晴らしい事業を祝福するとともに、私達全ての明るい未来を祈念いたします。

皆様のクアラルンプール滞在の日々が素晴らしいものとなりますように。また、美しいマレーシアとその温かく友好的な人々が皆さんの一生の思い出となりますように。

最後に、ヘンリー・フォードの言葉を引用いたします。「出会いは始まりであり、寄り添うことは前進、そして共に歩めば実りである。」

平成29年11月30日

歓迎夕食会

コンコルドホテル・シャーアラムにて

## 第7章

# 本事業に対する評価等



# 1 管理官報告

## 第44回「東南アジア青年の船」事業

管理官 駒形健一



第44回「東南アジア青年の船」事業は、2017年12月12日、313名の参加青年（PY）と11名のナショナル・リーダー

（NL）、11名のOBSC代表者と共に、東京港晴海ふ頭に無事帰港し、全ての事業を成功のうちに終了しました。参加青年の解散式での姿を見ながら、本事業はその目的を十分に達成し、大きな成果を納めたと確信することができました。本事業に関わった日本とアセアン各国の政府・自治体、受入委員会、事後活動組織、ホストファミリーなど全ての関係者に心から感謝したいと思います。本報告では、管理官として対応した東京出航後のプログラムが参加青年にとってどのような意味を持ったのかという視点で、管理官としての評価を加えながら、41日間の訪問国活動と船内活動を振り返りたいと思います。

### 1 訪問国活動

#### (1) 表敬訪問

SSEAYPとしてのカンボジア寄港は2度目でしたが、プノンベンへの移動は、前回の陸路とは違い、カンボジア側が飛行機を2機手配したため、参加者全員が短時間に移動することができ、ベトナムで開催されたAPEC首脳会議への出席を遅らせてまでして我々のために日程を割いたフンセン首相への表敬を果たすことができました。

ラオス訪問は管理官をヘッドにYL11名とラオスNLによる代表団派遣でしたが、ラオス青年同盟による空港での歓迎を始め、訪問先で盛大に歓迎していただき、トーンルン首相への表敬を行うことができました。首相にYLたちと気さくに会話をしていただいたことは、彼らの良い経験になったと思います。

タイ、インドネシア、マレーシアにおいても大臣との表敬を果たすことができ、表敬訪問は全体としても大きな成果を上げたと評価します。PYは表敬訪問を通じて、言わば青年大使としての役割を果たすという、貴重な経験をすることができ、国の代表として参加しているという自負・責任感を感じることができたと思います。

#### (2) 歓迎夕食会

カンボジアのプノンベンで行われた歓迎夕食会では、教育青年スポーツ大臣代行、フンセン首相の息子フン・マニ氏や各国大使が列席する前で、PYによる各国ごと

のチアが行われましたが、出席していた堀之内日本大使が「「東南アジア青年の船」事業が、こんなに素晴らしいものとは思っていなかった。」と感嘆の感想を述べられていたことが示すように、列席VIPに強い印象、それもPYや本事業のポジティブな良い印象を与えたことは間違いないと思います。また、チアを行った彼らも、国の代表としての誇りを抱いたことでしょう。タイ・バンコクでは各国ごとのショート・パフォーマンスが行われる中、出席していた担当大臣が、各テーブルを回りPYに声をかけられていたのが印象的です。インドネシア・ジャカルタとマレーシア・クアラルンプールでは各国混成のジョイント・パフォーマンスが行われ、船内での交流の成果を発表する良い機会になったと思います。マレーシアでは国民的人気のあるマレーシア青年スポーツ大臣がスピーチを行いました。この事業への強い思い入れが伝わってくる素晴らしいスピーチで、PYも大いに励まされたと思います。大臣の帰り際に、私の方からお礼を込めてSSEAYPのバッジを差し上げました（何かの機会に胸につけてくれることを期待しながら）。

#### (3) 課題別視察・現地青年との交流

カンボジアではディスカッション活動と連携する課題別視察をプノンベンで行いました。私が同行した環境省では、大臣に代わって対応した次官級の方が、カンボジアの環境行政をツーリズムと関連させて熱く語り、PYの多くの質問に的確に回答し、参加者の満足度も高かったと感じました。他の視察先でも積極的な討論が見受けられ、船内ディスカッションに向けてPYへの良い刺激と気づきに役立つものになったと思います。タイ、インドネシア、マレーシアにおいても課題別視察を行い、各視察先で有意義な経験ができたと思います。特に、ジャカルタにあるアセアン事務局には全員で訪問し、担当官のコーディネートにより、PYの代表によるパネルディスカッションが行われるなど、ASEAN設立50周年を迎える年の事業にふさわしい有意義な訪問となりました。

カンボジアでは、出港の日に、全員で岸壁にSSEAYPの人文字を描いてドローン撮影を行った後、シアヌークビルのビーチ際に移動し、現地青年との交流会が開催されました。グループに分かれて様々なゲームを行い、歓声を上げながら交流を深めましたが、同時に、各SGの絆を強くする機会にもなったようです。ここには、（前出の）フン・マニ氏が顔を出し、気さくにPYらと語っていました。

#### (4) ホームステイ

ホームステイは全ての訪問国において実施されまし

た。ジャカルタでのホームステイ・マッチングにおいては、インドネシア（バンドン）の伝統楽器「アングルン」が参加者全員に配られ、プロの指揮者によるリードでホストファミリーと一緒に全員で演奏を行いました。PYの忘れがたい良い思い出となったことでしょう。ラオスではユース・リーダーのみでしたが初のホームステイが実施され、首都ビエンチャンだけでなく、週末だったこともあり郊外でのランチをホストファミリーと楽しむなど、皆の満足度も高く成功裏に終わったと感じています。いずれの国でも、PYは現地の人々と寝食を共にし、その国の生活や文化の実際を肌で体験し、言葉の壁を越えた心の交流をすることで、通常の旅行ではかなわない得難い体験をすることができたと思います。その体験の内容は参加者や国によって様々だと思いますが、ホストファミリーやホームステイメイトとの交流がこれからも続いてくれることを願います。

#### (5) 船上既参加青年の集い

各寄港地において開催された船上既参加青年の集いには、SSEAYPのひと桁世代から昨年のPYまで、幅広い世代の既参加青年（ex-PY）が参集し、事後活動組織の絆を深める良い機会となったと思います。参加者の皆さんが、船での思い出と共に、本事業への感謝の思いを語っていたのが印象的です。私も過去に何回か乗船しているため、各地で同期のex-PYと出会い旧交を温めることができたのは、とてもうれしかったです。船上既参加青年の集いが行われない国からも多くのex-PYの参加があり、思わぬ再会を果たすこともできました。各国の事後活動組織は、船の寄港を機会に行われるこの船上既参加青年の集いを通じて、既参加青年の結集、組織の活性化を図っていると感じました。各地で事後活動組織の資金支援のため行われているSSEAYPグッズの販売も興味深いものでした。

#### (6) 到着歓迎式

シアヌークビル以外の寄港地において到着歓迎式が行われ、バンコクでは屋外の予定が雨天のため直前にドルフィンホールに変更になるというハプニングがありましたが、おおむねスムーズに開催されました。シアヌークビルでは、船が予定より早く前日の夕方到着したにもかかわらず、大勢のボランティアの現地青年による歓迎パフォーマンスが岸壁で行われ、東京出港後の初寄港地ということもあって、PYも船上からチアを送り返すなど、大いに盛り上がっていたことが印象的です。他の寄港地でも、伝統的なダンスが岸壁で披露されるなど、盛大に歓迎してもらいました。

#### (7) 船内公開

船内公開は全ての寄港地で実施され、1,000人を超え

る入場者を船側の協力の下、管理部総出で対応に当たり、ほぼ時間とおりに進行することができました。PYがホストファミリーに自分の「家」を誇らしげに紹介する姿が微笑ましく感じられました。

#### (8) 出港式

全ての寄港地で出航式が行われましたが、どの寄港地でも、PYによる各国ごとのフラッグチアが行われました。練習を積んだ成果を国の代表として、船のギャングウェイという晴れやかな舞台で、見送りに来たホストファミリーや各国のVIPに発表することは、とても素晴らしい経験であり、国を代表しているという自負心と自信を高める機会になったと思います。

出港にあたっては、デッキから様々な色のリボンを、岸壁で見送るホストファミリーに目に涙をにじませながら投げる様子は、船の事業ならではのハイライトだと改めて実感しました。カンボジアのシアヌークビルでの出港式では、フンセン首相の息子フン・マニ氏が出席し、私が投げたテープを受け取ってもらいましたが、カンボジアのこの事業への関心の強さを象徴していたと思います。マレーシアのポート克蘭でも、出港式に出席した政府高官が、多くの見送りの人たちと一緒に、私のテープを握りながら別れを惜しみました。フラッグチアやこうした別れのシーンの演出は、PYの心に深く長く事業の思い出を刻みつける効果をもたらしていると感じました。

### 2 船内活動

22日間の船内活動では、途中、インフルエンザが一部のPYに発生し、一定期間、全ての活動を停止し、NPやSG活動を延期しましたが、PYの協力と各小委員会の献身的な努力によって、全ての公式プログラムを実施することができました。

#### (1) ディスカッション活動・事後活動セッション

ディスカッション活動は、インドネシアまでの航海が比較的平穏だったこともあり、過去に類を見ないほどPYの参加度合が高かったようです。ディスカッション活動運営委員会の委員長らによる運営が素晴らしく、プレゼンテーションの段取りなど委員会主導で進められ、ディスカッション活動の活性化に大きく寄与したと思います。更に、各分野の専門家でありPYのメンターでもある8名のファシリテーターの献身的な働きにより、ディスカッションの内容も深くまで掘り下げられ、最終のプレゼンテーションに見られたように、その成果は大きなものが上がったと感じています。DGごとのプレゼンテーションは、あるDGは演劇風に、あるDGはパワーポイントを活用するなど、いかに表現するかにも工夫が込められていて、かつ、伝えたいことが的確に伝わって

くる素晴らしいプレゼンテーションでした。私自身も、生活習慣病に関するDGで、各小グループが開発したプロダクトの発表会の審査員・表彰者として参加しましたが、ITを積極的に活用した創意に満ちたアイデアとプレゼンテーションに圧倒されました。また、このDGに限らずPYの能力を大きく引き出すというファシリテーターの役割も重要だと認識しました。その後の事後活動セッションは、OBSC代表者によってリードされましたが、ファシリテーターたちは、マレーシア・ポートクランで船を去った後もPYに影響を与え続けていたと思います。

事後活動セッションは、ポートクランから乗船したOBSC代表者による全体会の運営が素晴らしく、程よいタイミングでエナジャイズセッションを入れてPYが飽きることのないよう工夫がされていました。各国ごとの事後活動の議論におけるOBSC代表者の的確な指導もあり、最終日の各国の事後活動のプレゼンテーションでも具体的で魅力的なアクションプランを発表することができました。各国において事後活動が実行に移され、船での経験が社会に還元されることを期待します。

## (2) ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、75分という制限時間の中で、創意工夫を凝らした素晴らしいパフォーマンスにより国の紹介を行っていましたが、どの国も見ごたえのあるものでした。文化紹介という点では、過去のNPと類似するところがありましたが、各国PYの紹介ビデオは秀逸で（国によっては、乗船後に撮影したものもあり）、PYが登場するたびに歓声が上がっていて、PY同士の交流の親密度をうかがわせました。PY、NL、管理部はNP上演国の民族衣装を着て参加しましたが、衣装による文化交流の場でもあったと思います。ともかく、各PYはその持てる才能・技量を個人あるいはチームとしていかんなく発揮し、観客と一体化して、PY同士の絆を一層深める効果があったと感じました。

## (3) PYセミナー

PYセミナーは従来のクラブ活動に代わって、「世界青年の船」事業で実施しているものを取り入れたプログラムで、「東南アジア青年の船」事業としては初めての試みでした。セッションごとの参加者の配分、時間・場所の配分など、全体の調整が大変な中で、小委員会がうまく機能し、運営側、参加側ともに満足のいく内容になったと思います。特に、計8回、全部で60余りのセミナーが開催される中で、各場所のマイク・音響設備やボードなどの物品の配分の調整という裏方の苦労を管理部と共有しながら取り組んだことも、今後につながる良い経験になったと思います。私自身も幾つかのセミナーにフル参加しましたが、従来のクラブ活動と比べて、

参加者側はより多くのメニューに参加でき、運営者側もより多くのPYが関わり、各自の経験や考えを他のPYとシェアすることができたので、全体としてのPYの満足感も高く新規導入は成功だったと感じました。今後も改善を重ねながら続けていくことが望ましいと思います。

## (4) SG活動

SGは、本事業において、キャビン生活とともに国を超えた交流を深める重要な活動単位となっています。SG活動小委員会メンバーの卓越した企画・運営によって、3回の工夫されたユニークなプログラムが実施されました。どの回も、PYが楽しく交流しながらSG同士が競うもので、SGの絆を強くする絶好の機会となったと思います。特に、最後のSG活動では、未来の自分に向けた手紙を書くというものでしたが、演出が素晴らしく、プログラム全体を振り返り将来に思いを馳せる貴重な時間になったと思います。また、小委員会メンバーがエナジャイザーとして活動を活性化させていたことも特筆されます。

## (5) 自主活動（VA）

自主活動は、インフルエンザの影響で一部行えなかったのが残念ですが、積極的に企画がなされ、NPが全て終わった後ということもあって、PYがリラックスして夜の交流の場を楽しんでいたのが印象的です。特に、管理部員が審査員となったSG別のタレントショーや、NLが審査員となったアポン・ラオ（ラオスの民族衣装を着て競うコンテスト）など、例年開催されているようですが、時間が過ぎるのを忘れるほど見ごたえのあるものでした。私自身も自主活動として、各寄港地活動で自ら撮影したチアやショート・パフォーマンスのビデオを編集してシアターで上映会を行い、大変好評でした。2回に分けて上映会を行いましたが見ることができなかったPYの要望もあり、下船後、事後活動としてフェイスブックに投稿し、皆に見てもらうことができました。

## (6) フェアウェルフェスティバル

昨年、インフルエンザの影響で実施できなかったフェアウェルフェスティバルを2年ぶりに実施しましたが、本事業のフィナーレを飾ることができ素晴らしい時間を皆が共有することができました。

自分たちの活動を振り返りながら、今後の活動への思いと交流の絆を確かめ合う、良い機会になったと思います。また、OBSC代表者、NL、管理部がプレゼンを行ったことは、PYとの一体感をさらに強くし、忘れたい思い出づくりの一助となる素晴らしい演出になったと思います。

## 3 所感

### (1) 課題別視察

各国での課題別視察で共通して言えることは、双方向のやり取りが重要だということです。単なるツアーとなるのは論外ですが、視察先の対応者が一方的に説明するだけでなく、意見交換の時間を十分取ることが重要です。特に、船内のディスカッションにいかすという意味で各DGと連動している日本と次の訪問国（今回はカンボジア）での課題別視察では、十分な工夫と配慮が求められます。今回、大部分の視察先では、質疑応答・意見交換という双方向のやりとりが行われ好評だと思いましたが、今後も、単なる施設見学・担当者のプレゼンテーションだけに終わることがないように留意していく必要があると思います。

### (2) COC

各寄港地出航後に行われるCOCでは、訪問国活動を振り返り評価を行いました。ホームステイで発生した問題の報告に多くの時間が割られました。今回、報告案件が非常に多い場合は、NLにペーパーで後日提出してもらうなどの措置を取りましたが、今後も、COCがポジティブな議論をしていくためには、このような合理的な運営が必要だと思います。今回は定例外にCOCを開催するほどの重要な問題が発生しなかったことは幸いでしたが、PYはCOCが懲罰機関かのようにとらえていたようです。COCによる船内活動のガバナンスは引き続き必要ですが、懲罰機関ではなく、今回各NLが演じたように、PYの良き相談役・メンターのような役割が好ましいと思います。また、今回の船内活動でのPYのリーダーシップの高さからすれば、PY自身による運営、自己解決型のプログラム運営が、もっとなされても良いと感じました。

### (3) ディスカッション活動

ディスカッション活動において更に深掘りした議論するには、グループ・ディスカッションの時間が十分でないとの意見もファシリテーターからありました。乗船までにディスカッションの準備を十分行うことができるようにすると共に、議論を更に深めるために、ディスカッションの全体セッションを合理化するなどして、グループ・ディスカッションを増やすことが望ましいと思います。

### (4) 17年前との変化

前回、管理官を担当した2000年の事業と比較すると、まずPYの英語力が上昇し、全体として均等化してきたことが上げられます。ディスカッションなど、英語力の均等化がその成果を上げる前提となるプログラムについては各段の質の向上が見られました。2000年の時は、解

説トークよりも演劇風のプレゼンが多く、できるだけ多くのPYに参加させようという工夫が見られましたが、今回は、一定の英語力を前提とした、中身の濃いプレゼンが多かったと感じました。

また、それぞれの活動を運営する委員会メンバーの企画力・運営能力が高く、初めて導入したPYセミナーを始めSG活動や自主活動の創意工夫性の高さ、綿密で計画的な運営には舌を巻きました。

PYセミナーは前記のとおりですが、元々、管理官を担当した第14回「世界青年の船」事業の時に、伝統的な太鼓や踊りだけでなく、日本の現代社会を多面的に紹介することを目的として、日本参加青年が運営者側、外国参加青年が参加者側になるジャパンデイ・ワークショップを開催したことが始まりです。PYセミナーが日本参加青年・外国参加青年双方が参加する形でSSEAYPに導入され成功したことは、SSEAYPの参加者の意識が高まった証拠で、大変喜ばしいことだと思っています。

また、特記すべき事項として、東南アジアでスマホやSNSが大きく普及している中で、インターネットから遮断された船内活動は、まだそれほど普及が見られなかった2000年当時と比べて、外の世界との断絶効果（閉じ込め効果）が非常に高くなったと思います。寄港地に到着するや否やデッキに出てスマホをいじり始めるPYを見ながら、外界から隔絶され参加者同士だけのFace to Faceによるコミュニケーションにどっぷり浸かるといふ、船の事業ならではの特色が、（陸上プログラムと比べて）以前より格段に特別で貴重なものになってきていると感じました。

## 4 皆さんへ

(1) 二宮船長始めシップクルーの皆さんには大変お世話になりました。PYがいかに皆さんに感謝していたかは、フェアウェルフェスティバルでのプレゼンテーションでスクリーンに映ったクルーの方たちに皆が歓声を上げていたことから分かります。二宮船長は、サービス精神旺盛で、ジャカルタからポートクランへの航海中、シンガポールに街並みが見えるほど近づいてもらったり、駿河湾に停泊し、晴天にくっきりと輝く富士山を日の入るまで堪能させてもらったりしました。参加青年にとって、本事業、とりわけ日本の素晴らしい思い出になったと思います。

(2) NLの皆さんには、事業の準備の段階から最後まで、本事業が成功するために献身的な働きをしていただき、心から感謝します。朝の集いや国旗掲揚式では、PYを励ましてもらい、船内活動の意義をPYに改めて気付かせる話をしてもらいました。また、NL自ら積極的に船内活動に参加してPYの良い動機付けに大いに貢献していただきました。

(3) 管理部の皆さんは、それぞれの役割をしっかりと果

たし、チームワークも素晴らしく、自分が経験した回の中でもベストな管理部だったと思います。特に、ファシリテーターの皆さんには、ディスカッションを上手にリードしていただき、素晴らしい成果に大いに貢献してもらいました。それだけでなく、船上既参加青年の集いでの受付、船内公開での誘導など、管理部としての仕事も立派にこなしていただき、大変助かりました。また、ナースには腹痛やインフルエンザの発生に迅速・的確に対応していただき、船内活動を滞りなく実施することができました。皆さんの奮闘ぶりに、心から拍手を送りたいと思います。

(4) PYの皆さん、事業を終えて数か月経ちました。そろそろSSEAYPシックから回復している頃だと思います。皆さんが経験したことは、人生で1回限りの出来事かもしれませんが、皆さんが船で夢描いた物語はこれから始まります。同じ回の同志の繋がりをいかすことはもちろんですが、SSEAYPがこれまでに培った膨大なネットワークの宝庫をうまく活用し、皆さんを取り巻く身近な社会や広い国際社会で、これからそれぞれの物語を展開していかれることを期待しています。私自身も事後活動組織活動やフェイスブックを通じて、皆さんとの交流を長く続けていきたいと思っています。帰国報告会での管理官報告の一部を改めて紹介し、それぞれの新しい人生に旅立つ皆さんへのはなむけの言葉としたいと思っています。

参加青年の皆さん、あらためて、おめでとうございます。皆さんは、腹痛やインフルエンザなどの困難を克服してきました。もちろん、船酔いもですね。

今日、皆さんはついに「東南アジア青年の船」事業から卒業します。本事業が皆さんの人生に、友情や経験、思い出などたくさんの貴重なものを与えてくれたことと思います。

さあ、今度は皆さんが自分の国や世界の人々に価値ある何かを提供する番です。事業は終わりますが、皆さんの物語は終わることがないと私は強く信じています。事業が終了してしても、船の仲間と協力しながら、更に物語を作っていくてください。

参加者の皆さん、私達がこの旅を通じてASEANから日本の青い海の上に築いた、平和と友情へとつながる新しい道が見えることでしょう。より良い未来に向かって、共にこの道を歩んで行きましょう。そして、自分の国の若者を迎え入れ、この道を共に歩んで行きましょう。

ありがとうございます。

またお会いしましょう。

皆さんのことが大好きです！

### 5 最後に

SSEAYPに管理官として乗船したのは今回で3回目となりました。今回は、前回、前々回(1999年、2000年)に参加できなかったブルネイも参加し、ASEAN10+JAPAN参加による完全な形での事業に乗船することができた上、大きく成長したSSEAYPをつぶさに経験することができたのは望外の喜びです。関係者の皆さんに厚く御礼申し上げます。「東南アジア青年の船」事業が、事業の質を高めながら、関係者の協力のもと、これからも長く継続・発展していくことを願ってやみません。

## 2 参加青年による事業評価

### 第44回「東南アジア青年の船」事業

プログラム終了時に実施した評価シートの集計(ナショナル・リーダー11名、参加青年313名)

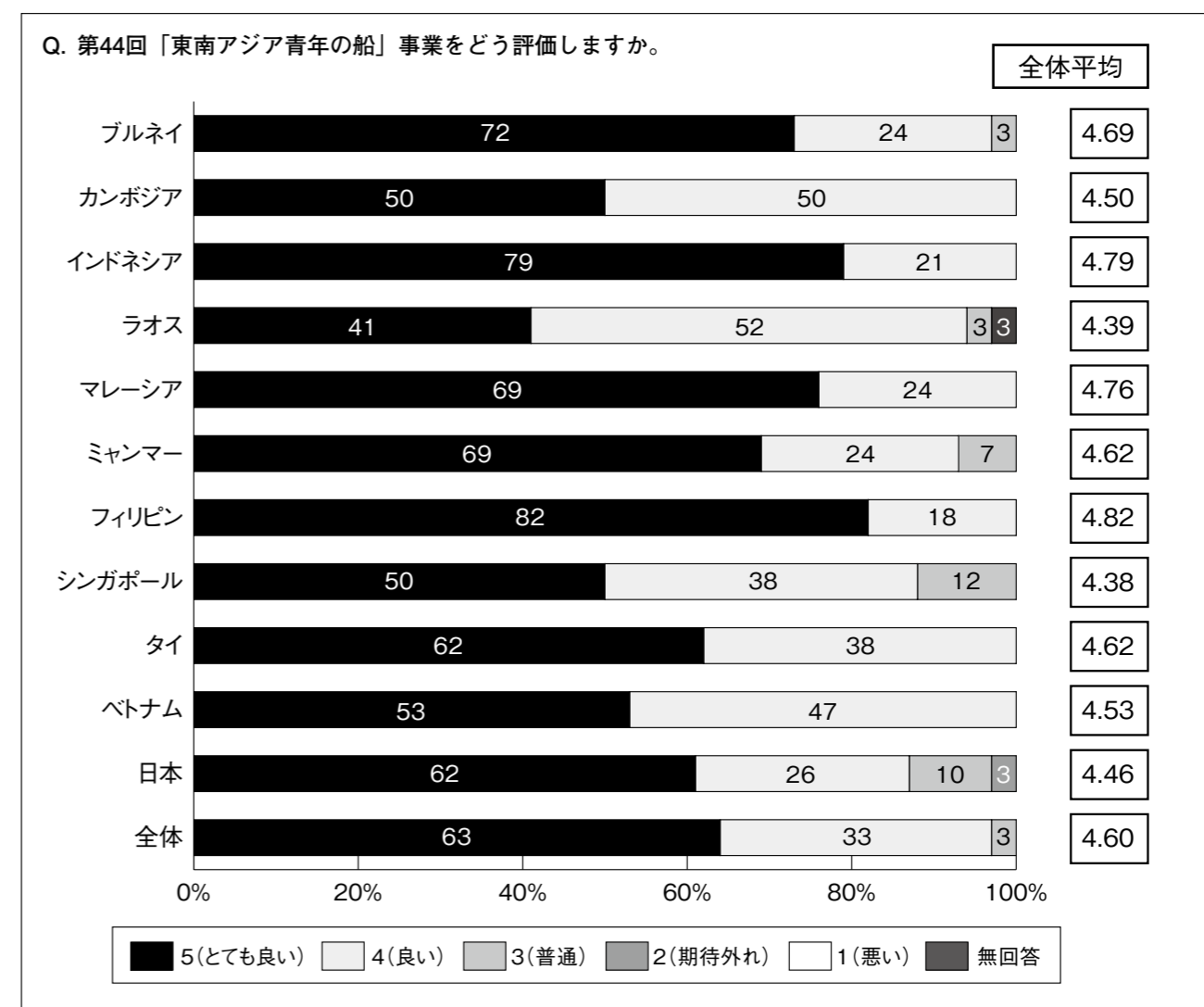
注: 値は小数点第一位で四捨五入されている。

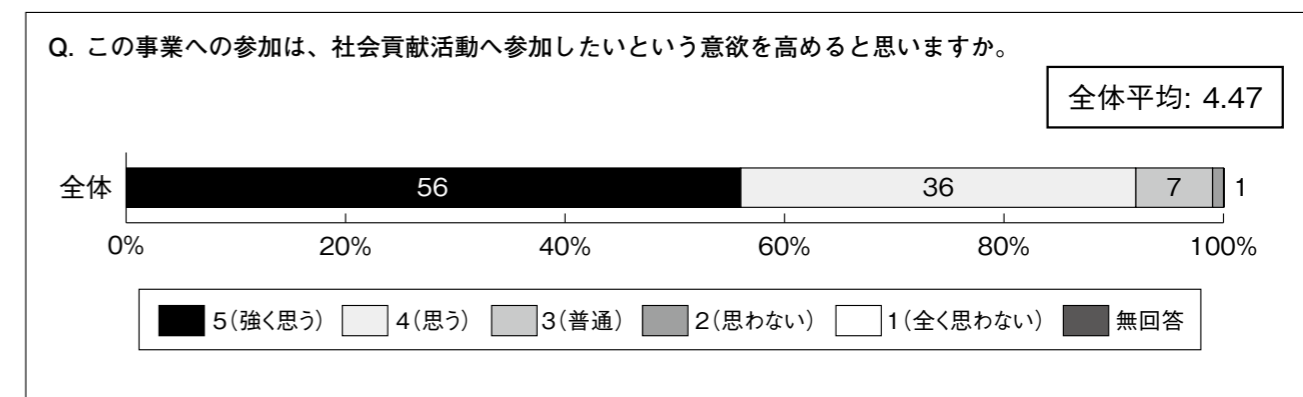
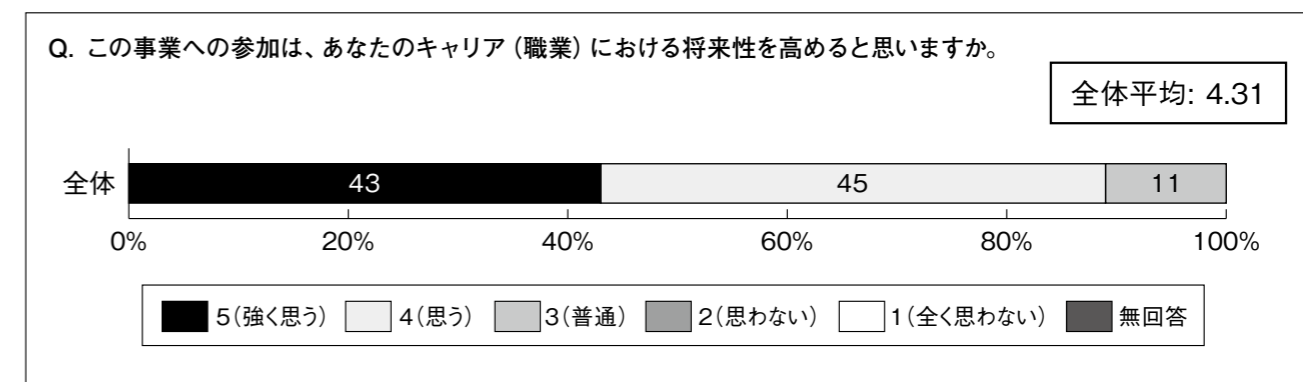
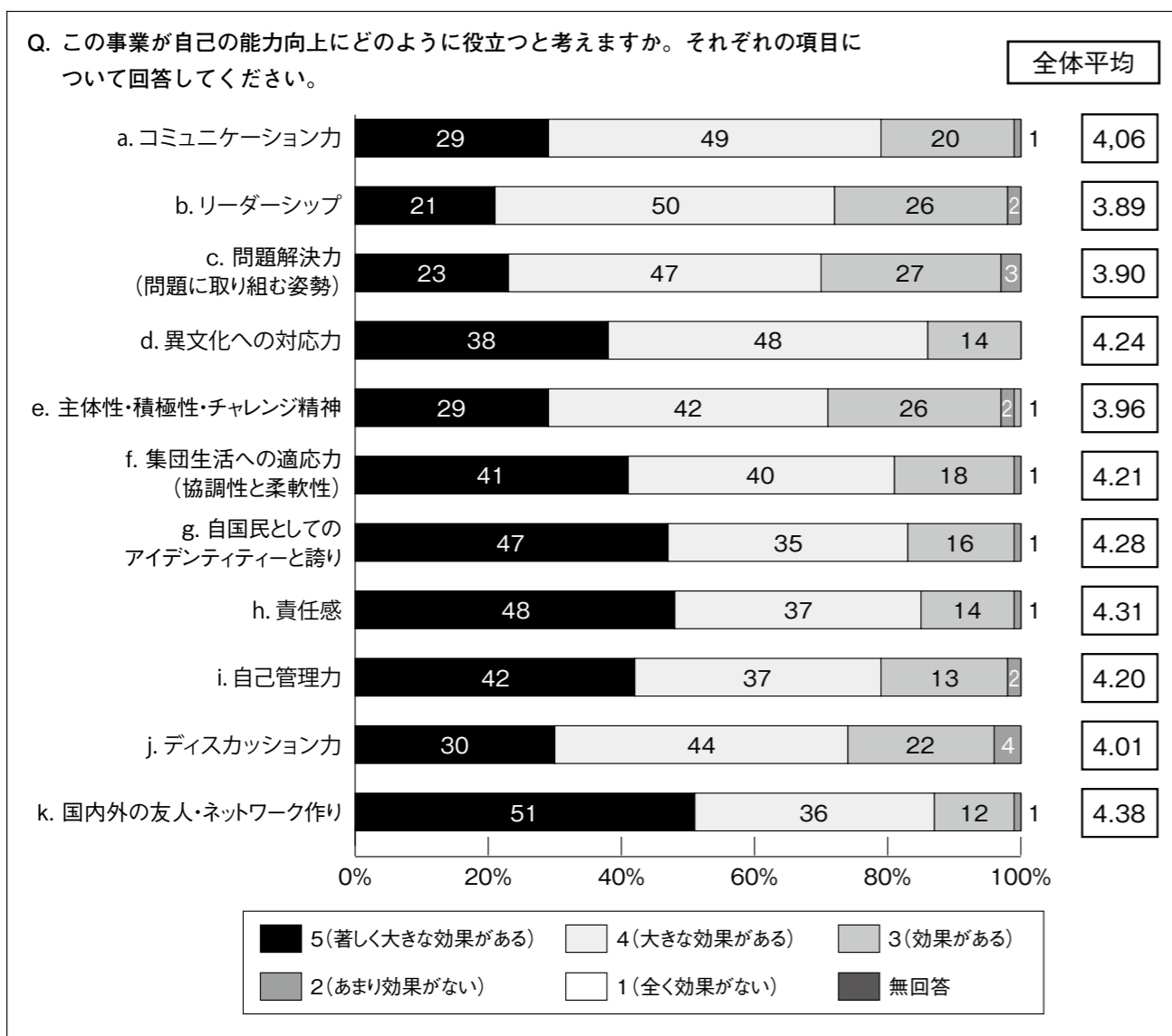
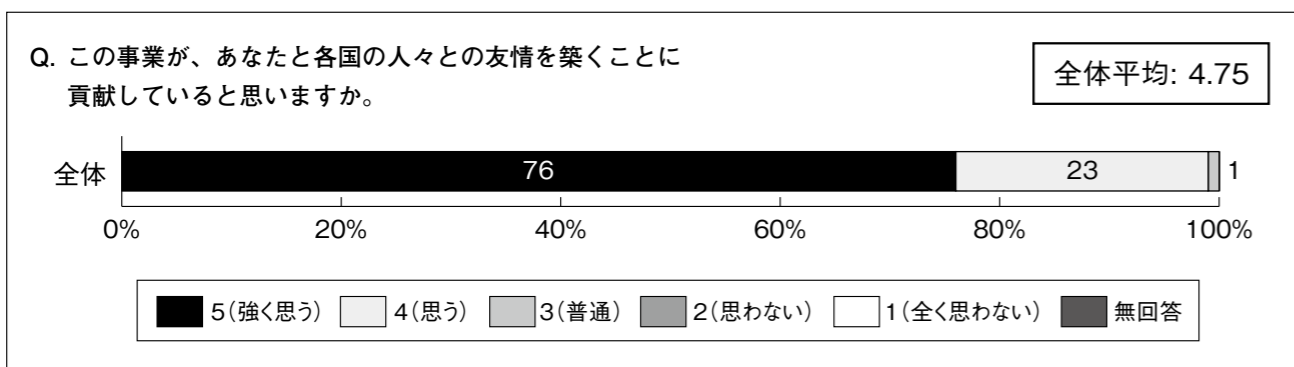
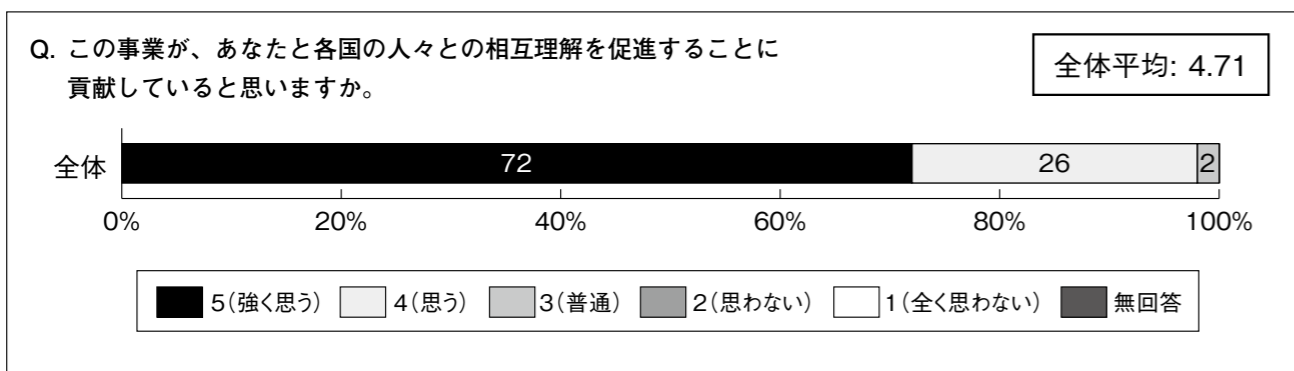
統計処理上、合計が100%にならないことがある。

#### [事業全体]

事業全体に関しては、全体平均は4.60で、96%の参加者が4以上(良い、とても良い)と評価した。

この事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に貢献していると思うかとの問いに対し、それぞれ98%、99%が4以上(思う、強く思う)と評価した。また、この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えるかとの問いに対し、「異文化への対応力」、「責任感」及び「国内外の友人・ネットワーク作り」に関して、85%以上の参加者が4以上(大きな効果がある、著しく大きな効果がある)の評価をした。

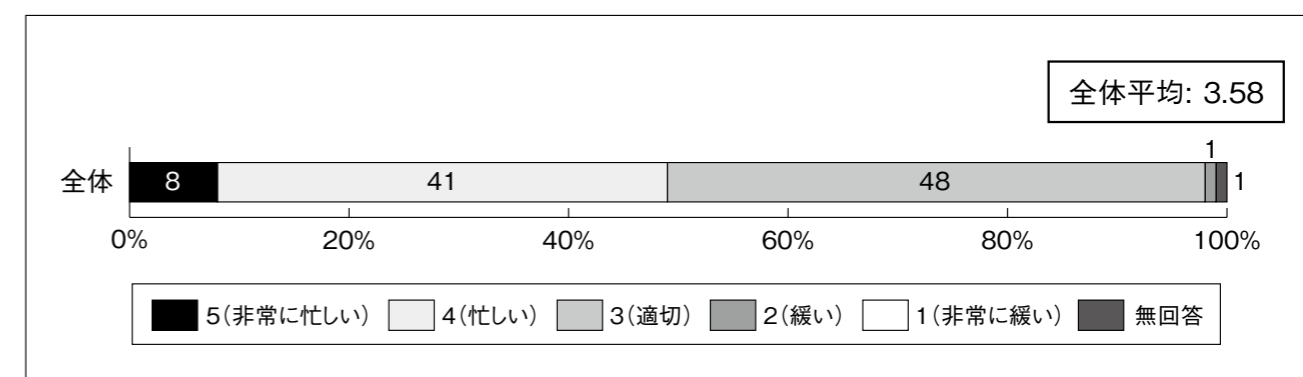




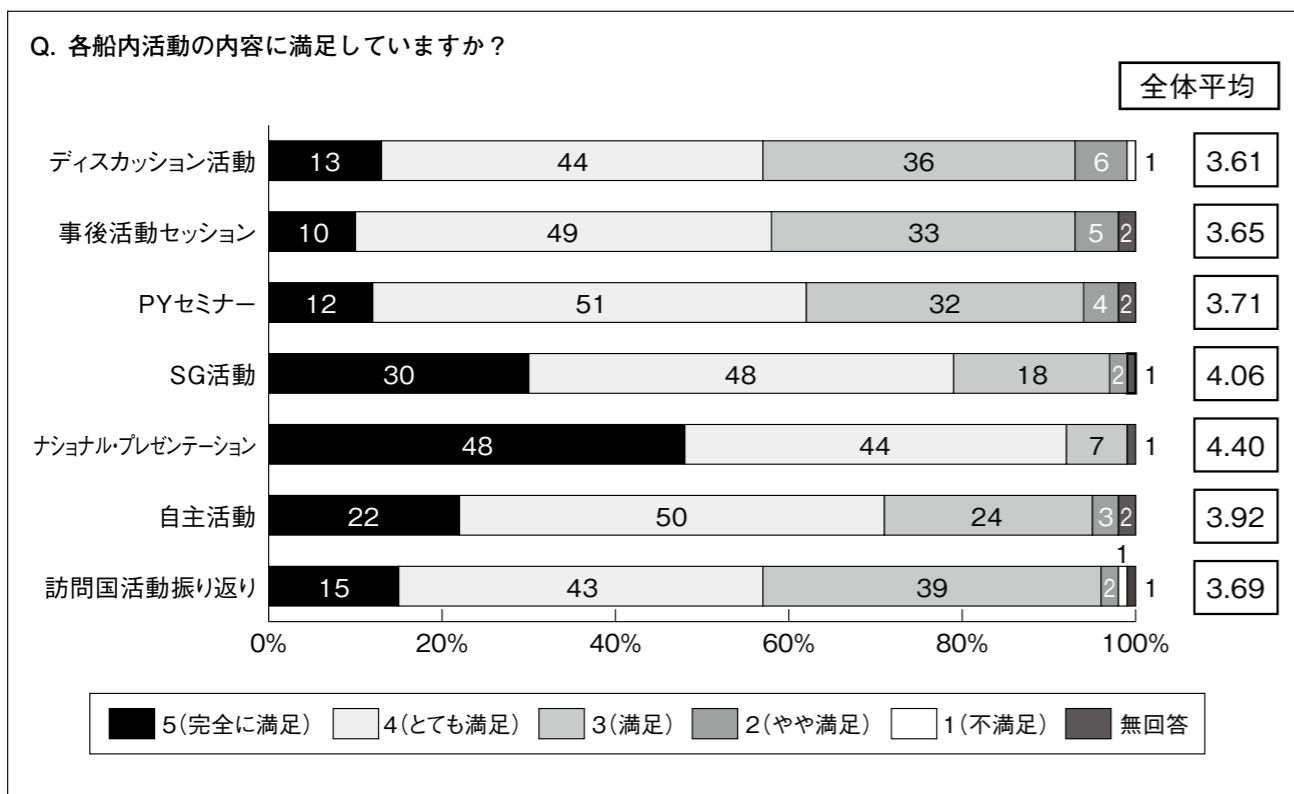
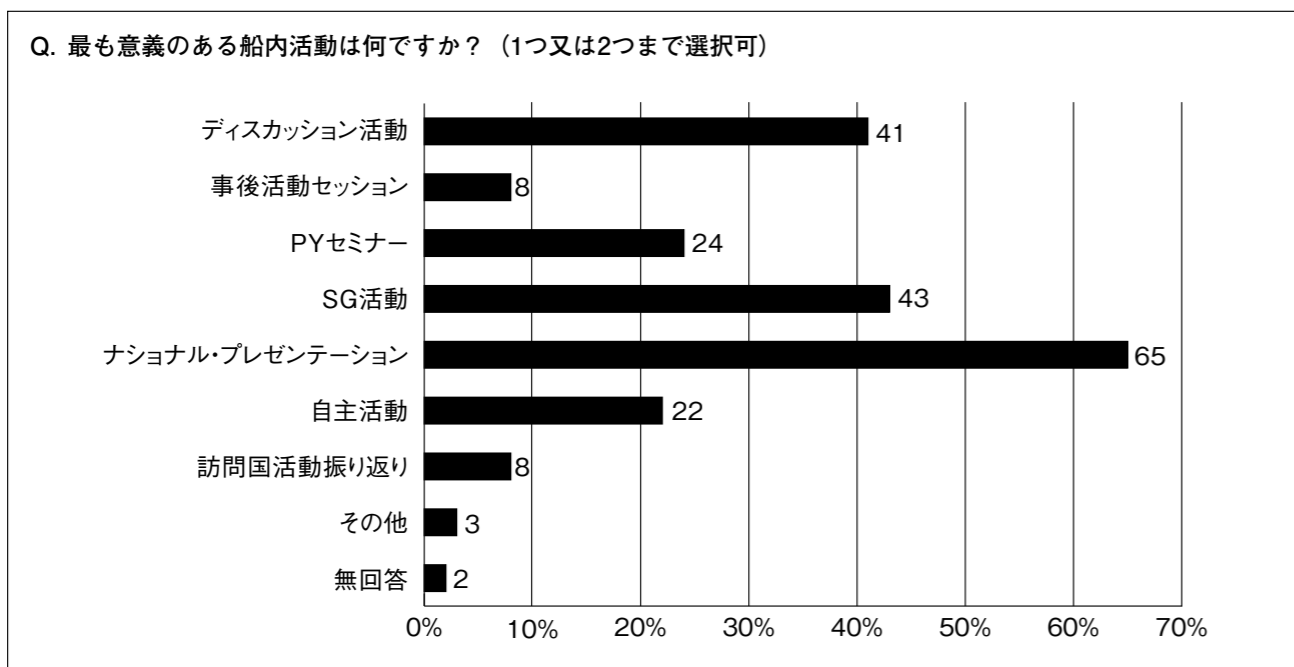
[船内活動]

Q. 船内活動の日程についてどう思いますか。

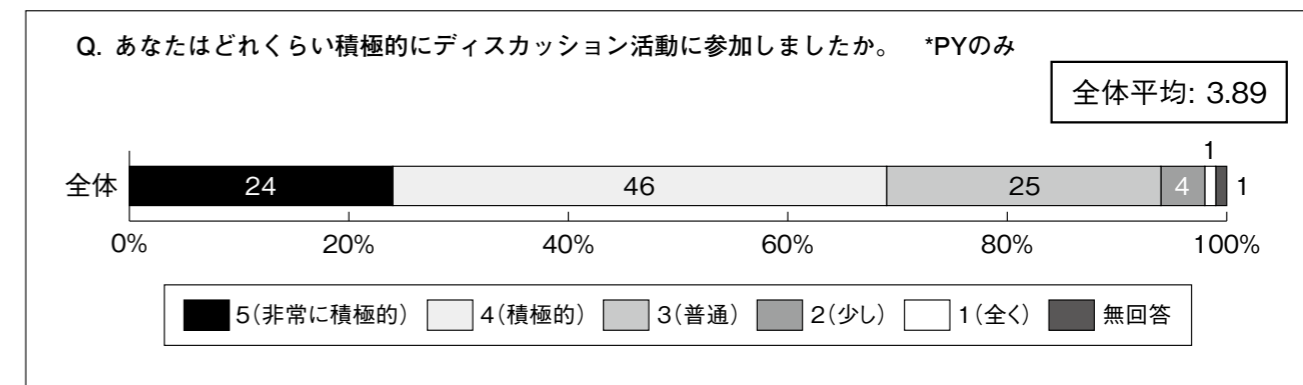
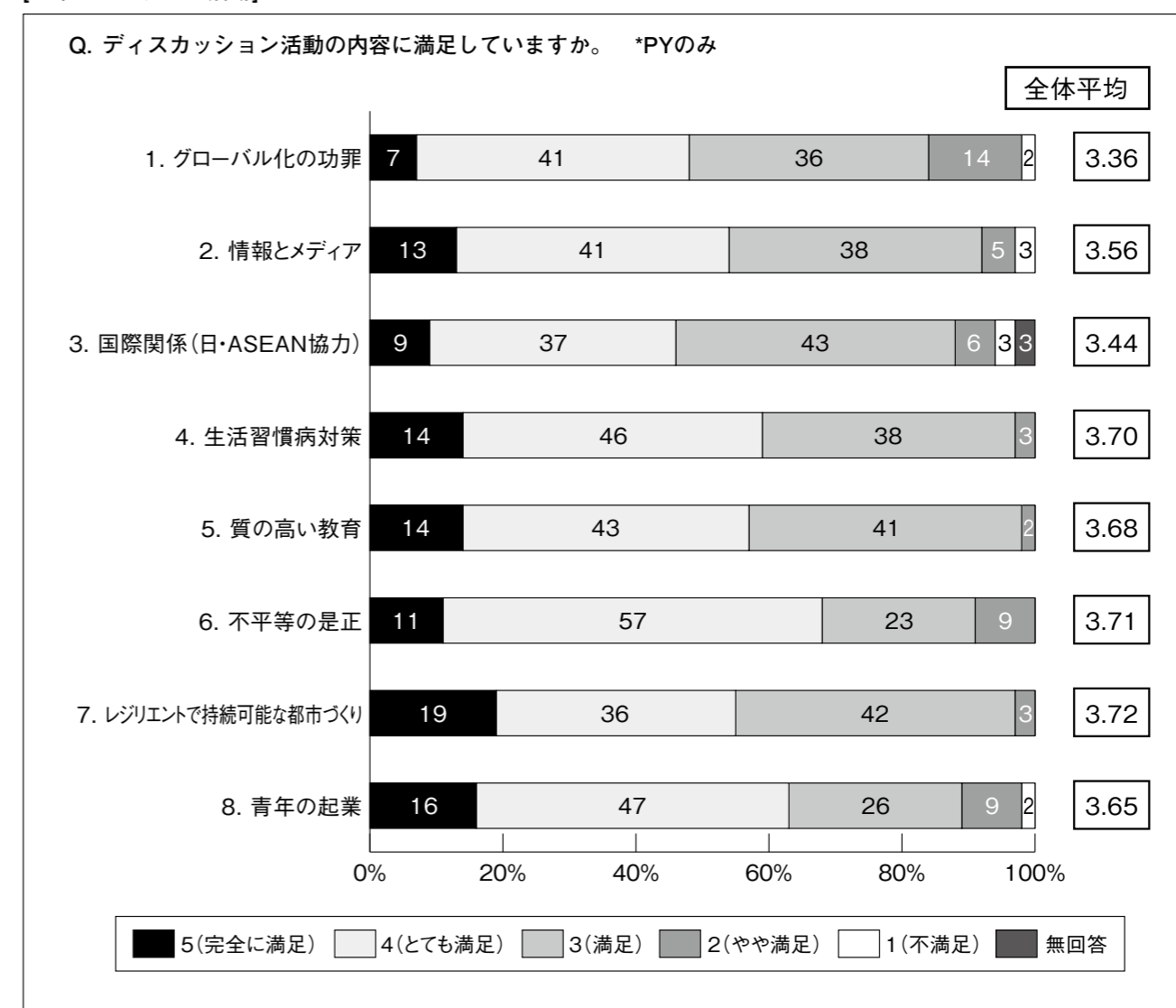
船内活動の日程について、48%の参加者が3(適切)と評価し、49%が4以上(忙しい、非常に忙しい)とした。



船内活動について、「最も意義のある船内活動」として参加者が選択（1つ又は2つまで選択可）したのは、多い順に、ナショナル・プレゼンテーション（65%）、SG活動（43%）、ディスカッション活動（41%）、となった。一方、それぞれの船内活動の内容についての満足度は、全体平均の高い順に、ナショナル・プレゼンテーション、SG活動、自主活動、となった。



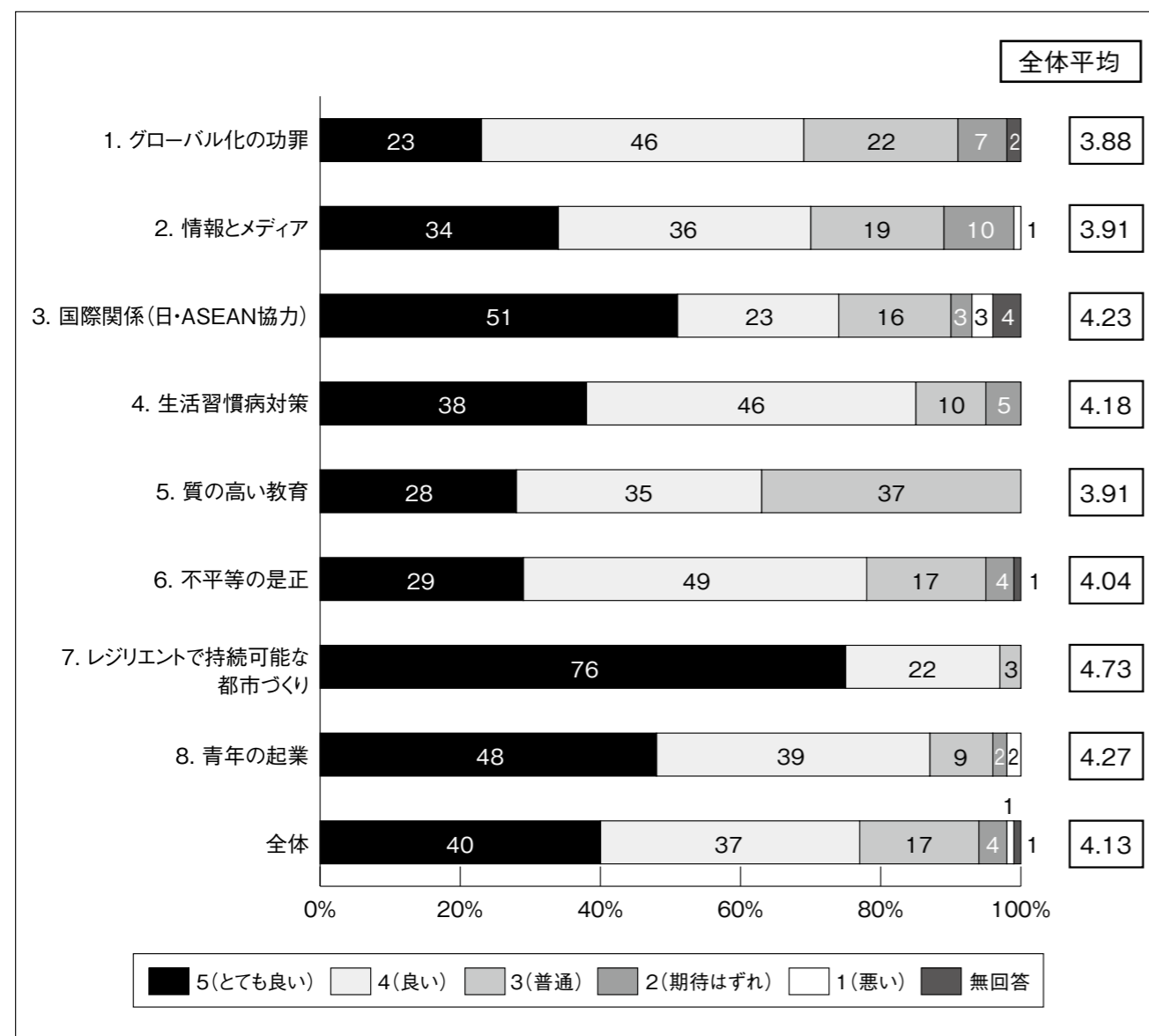
[ディスカッション活動]



[日本及びカンボジアにおける課題別視察]

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察をどう評価しますか。

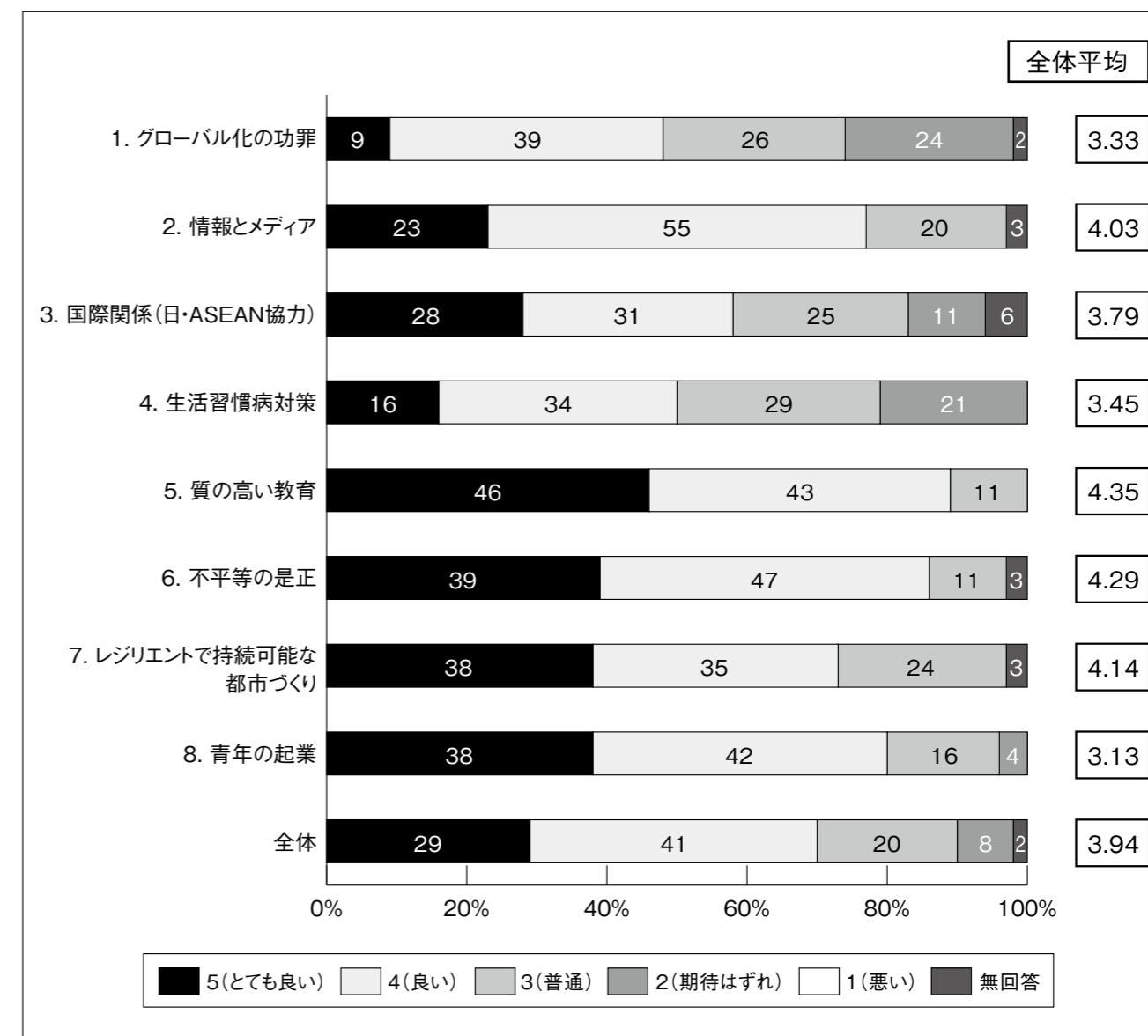
ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察に参加した青年の77%が4以上(良い、とても良い)と評価した。



- DG1: 国際労働機関 (ILO) 駐日事務所、独立行政法人日本貿易振興機構
- DG2: YouTube Space Tokyo, Yahoo! Japan x Youth Create
- DG3: 国際機関日本アセアンセンター、特定非営利活動法人開発教育協会
- DG4: 株式会社タニタ総合研究所
- DG5: 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)、東洋大学
- DG6: 特定非営利活動法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク、特定非営利活動法人キッズドア
- DG7: 三井不動産株式会社
- DG8: 株式会社ボーダレス・ジャパン

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、カンボジアにおける課題別視察をどう評価しますか。

ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、カンボジアにおける課題別視察に参加した青年の70%が4以上(良い、とても良い)と評価した。

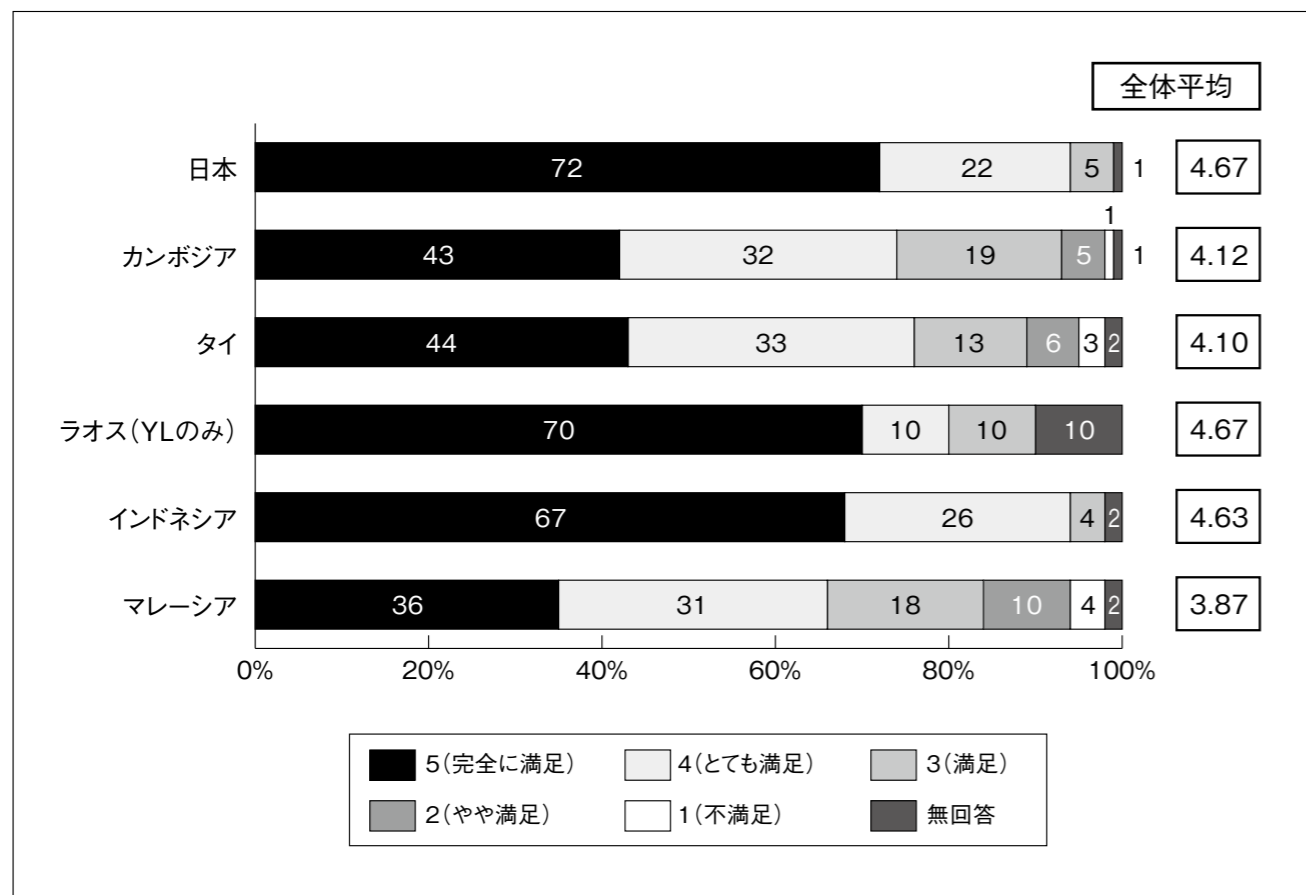


- DG1: カンボジア青年連盟
- DG2: 王立プノンペン大学メディア・コミュニケーション学科
- DG3: 王立プノンペン大学国際学科
- DG4: KHANA
- DG5: Krousar Thmey (新しい家族)
- DG6: 国連開発計画
- DG7: 環境省
- DG8: 国立経営大学

[ホームステイ]

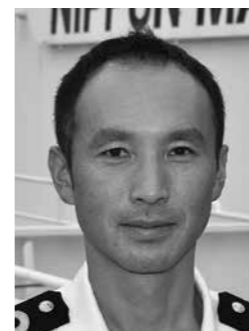
Q. ホームステイはどうでしたか。

全ての訪問国において、67～94%が4以上（とても満足、完全に満足）と評価した。



### 3 船長あいさつ

にっぽん丸船長  
二宮 悟志



船長としてPYの皆様と初めて顔を合わせたのは、出航日の船長紹介の場でした。その時、皆様の様子は初めての長い船上生活への不安なのか、式典のためか、多くの方が緊張している様子でありましたが、皆さまの国の言葉で挨拶だけさせていただいた際、私の分かりにくい発音でもそれぞれ笑顔で応えてくれました。その時のことを今でも昨日の出来事のように感じています。

11月2日、多くの人に見送られながら東京港を出港、シアヌークビルへと向かいました。東京湾を出るとにっぽん丸は少し揺れ初め、揺れはバシー海峡に近づくにつれ徐々に大きくなり、多くのPYが太平洋の荒波の洗礼を受け、初めての船酔いを経験したのではないのでしょうか。この時の船酔いの経験が後に船内でジョークとしてよく使われていましたが、このジョークは第44回のPYだけでなく、どの代のPYにも通じるジョークですので機会があれば使ってみてはいかがでしょうか。きっとにっぽん丸での楽しかった思い出話が更に盛り上がるでしょう。バシー海峡を過ぎると海も徐々に穏やかになり、ナショナル・プレゼンテーションも始まりました。船内での各活動も活発になり、航海始まりから数日は、自由時間に見かけるPYのグループは同じ国同士の仲間だけでしたが、この頃には色々な組み合わせのグループを見かけるようになってきたと感じました。

11月9日には最初の寄港地であるシアヌークビルに寄港、東京を出てから一週間ですが皆様にはとても長い一週間に感じた事でしょう。初めて一週間も陸から離れた生活、そしてWI-FIのない不便さが辛く感じたかもしれませんが、4泊5日のカンボジアでの訪問国活動は飛行機でプノンペンまで移動、3日間になっぽん丸から離れての活動でしたが皆様がにっぽん丸に帰ってきた時、まるで自宅に帰ってきた時の様にホッとしたように見え、皆様がにっぽん丸に馴染んできたと思いました。

11月13日シアヌークビルを多くの人達に見送られながら出港、この後バンコク、ジャカルタ、ポートクランへ寄港いたしました。各港間の航海日数が2～3日であったので時間が経つのが早く感じられた期間でありました。

各訪問国におきましてはPYの皆様が訪問国活動中にリユニオンパーティがにっぽん丸船内で実施されました。このパーティに参加させていただきまして改めて当

事業の重要性・素晴らしさ感じたような気がします。バンコクにおきまして、第1回「東南アジア青年の船」事業に参加した方から前年度参加青年まで幅広い世代において当事業で築いた交友関係、いや、それ以上の関係が今もなお続いており、その深い信頼関係のようなものに感動いたしました。シアヌークビル・ジャカルタ・ポートクランにおいても、寄港地国内在住の方だけでなく他国からわざわざリユニオンパーティのために来てくださった方、当事業に参加した経験もあって現地で仕事をされている方、当事業に参加してから30年40年経ってもバッチメイトと共に参加してくださった方々など、ex-PYの皆様と会って話を聞くたびに当事業の意義・素晴らしさを実感したような気がします。今回当事業に参加したPYの皆様もきっと第44回バッチメイトとの友情などが長きに続き再びにっぽん丸でお会いできるのではと思っています。

12月3日最終寄港地であるポートクランにおいても多くの方の見送りを受け日本へ向け出港、バシー海峡へ入る前の比較的穏やかな海面のうちに最後のナショナル・プレゼンテーションを終える事ができました。ナショナル・プレゼンテーションはどの国も素晴らしく、短い期間によくこれだけのプレゼンテーションに仕上げられたと感心いたしましたし、各国ともPYの団結力の強さをも感じました。バシー海峡においては往航より大きな揺れとなりましたが往航よりも船酔者が少なかったと思います。この頃になるとこの航海が終わってしまうと言う寂しさが出てきたのではないのでしょうか。東京帰着の前日には「富士山を見てみたい」というPYの要望に応えられ日本の美しき富士山を海からお見せでき、喜んでいただいた事は船長として大変うれしかったです。

12月12日東京港に帰着、今航海を事故等もなく無事に終了いたしました。

今航海中、船内運営を適切に行い第44回「東南アジア青年の船」事業を成功に導いた駒形管理官並びに管理部の皆様、内閣府並びに日本国際青年交流機構等の方々、及び各寄港地にてご協力いただいた関係者の方々に、深く感謝を申し上げます。そして、PYの皆様、にっぽん丸での43日は人生の中では短い時間でありましたが、この短い時間でも友情・信頼・尊敬等が生まれたならば幸いです。しかしながら、今航海が楽しかった、良い経験をしたでは終わらせず、今回得られた事や経験を今後の皆様の人生及び各参加国のため、又は世界の人々のために役立ていただければと願っています。

皆様とまたにっぽん丸でお会いできる日を楽しみにしております。

ごきげんよう。